

復旦書目載

三十五

大正四年五月中流起筆

特別
14
1919
284



と方温を獲て印をよ〜を一物粒を食す
出くお谷の例もあつた。元出く。未す
お谷名を危の人を其先代。也。其の友人
何也。其の著。蹟。に。傳。成。す。而。七。其。の
言。所。余。も。あ。ん。と。ま。る。る。乃。ち。又。顔
の。隔。と。傳。の。お。谷。も。也。五。畫。を。よ。く。せ
す。世。々。つ。人。に。畫。し。し。む。夕。顔。の。傳。也
〜。〜。〜。の。心。の。所。も。ん。か。東。南。の。印。也
也。其。の。印。も。乃。ち。別。畫。車。の。印。の。い。ま
い。は。い。ら。う。と。す。

東
林
六
卷

上頭ニ大木の口ニ寄せて吹く
と或は或との間を〜は梅也〜して使さず
下部に紐を通す。此れは尺許の紐を
して〜を昔寄と揚ぐ。一日田んをん
えん。〜紐。中。を。吹。つ。て。振。る。の。ま。る。ん
と。減。り。を。振。り。回。り。〜減。ら。う。果。し。ん。る。の
減。ら。い。〜し。き。降。る。を。あ。る。す。回。轉。列。け。の。い
烈。し。き。丈。も。ん。丈。も。ん。音。を。あ。ら。う。こ。こ。な
れ。し。初。め。し。其。死。の。互。ひ。に。接。近。す。所。以。と。其
重。重。の。物。に。登。り。所。以。と。を。え。り。と。う。こ
の。為。余。の。初。め。を。見。る。不。存。好。ま。ひ。の。由。ひ
〜。〜。の。の。唐。物。〜。〜。の。の。也。

性之其のまの修入るなり

○末這道成の穢海存るを狂亡をて
そつを流しつる海つるまふこころを流しつる
まふつるけんまふ海存る後秋の秋の
全次汽車中一美人の車中入るを
つ辞を入る海つる一男子えらるるの美
男子あるお物しをせをよめををま這疾
ま〜〜〜おひまを〜〜〜人のお物を守
よ初めしある本朝との河を海が國傳る
ことを知り流るあひ〜〜〜を海と何れの
位ある海に下る〜〜〜やを心つけらんや
流るよちを〜〜〜眼をつつて見るやと

麻糸織り言々。澤と云ふ金し。

○五月十九日平山中に物を送る皮文衣一個を
る。つら代馬一匹。明代の物をとむる蓋。人物
の凶畫。耳と肉。○又花弁の凸画。あし。毛七
彩も。とかくす。箱。物。とくし。其出所を問ふ。松
平。家。と。い。ふ。と。云。ふ。味。公。子。と。云。ふ。皮。細。工。の。よ
も。と。云。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。日。家。も。と。出。て。な。る。不。に。せ。し。微。し
ほ。く。し。地。多。又。候。の。年。津。る。な。る。ゆ。え。し。合。指
動。き。織。ひ。う。り。印。遣。え。え。つ。と。云。ふ。北。院。の。名
大。花。の。之。め。と。云。ふ。と。云。ふ。菴。の。名。に。属。す。而。も。是
に。格。を。と。改。と。する。に。違。つ。別。庭。大。花。と。い。ふ。也
出。て。ん。が。今。も。と。傳。の。と。違。つ。との。可。し。今。も。と。格。れ

東林良典

大花の表きと云ふ

○小林良典の才簡きと云ふを得たり。良典、格王左の
かと。明。つ。に。ある。と。い。ふ。勤。王。の。士。也。才。簡。な。る。と。い
稀。れ。る。と。い。ふ。と。い。ふ。の。大。夫。戸。田。忠。敬。の。才。簡。を。辨
ふ。即。令。其。む。ぬ。急。お。中。に。一。つ。と。い。ふ。と。云。ふ。と。云。ふ。良。典。の
傳。と。云。ふ。也。

小林良典

勤王家なり京都の人父を大宰サ貳元次といひ世々鷹司家の諸大
夫なり良典為人剛邁にして武事を好む安政の始より正四位下に叙
し民部権大輔に任じ筑前守と兼ね常に其主を輔け王政を復
古せんと欲し青蓮院宮及び近衛左大臣三條内大臣其他公卿の阿

に伺候し又下部伊三次橋本左内等と大に尊攘の議を唱ふ當時鷹
司大階政通心と幕府に寄せ尊攘の議を沮止せんとす良典痛く
之と憂へ一夜機を得て之を苦諫し主公をして大に反省する所あら
しめたり安政五年九月日下部橋本等捕はるるに及ぶ良典も
遂に捕はれ江戸に送られ榊原氏の館に幽せらるる翌年八月官を褫

ひ遠島の刑に處せられ未だ配所に到らずして十月十九日病て獄中
に死す年五十二明治廿四年四月朝廷其忠志を追賞し特に正四位
を贈るる殉難録稿(大日本名辞書七版)

○中川得梅 澤庵のち者候ニてを扱ひて一巻
と長う二巻とも扱ひて長篇といふ扱ひは珍しく
この也 往年をうす所中をいふことありしに堪ひ
てあてをうす かの久義 干し無んといふ
あふ者におかし 記述も白紙をうすといふは初
めをうすをいふし 次々此の者候と刻す
んとすおかしをいふ 二巻と久しくあてをうす
又うすをいふし 二箇也 久しに録す 御子
も又うすをいふし 河内石工門をうす 昔は名に日寛
義後の物あり 内室第一の河内を扱ひて
既しうすをいふし 久しを扱ひしに 河内を
既しす 二箇を記す 久しに出入すこと 深き大

たんとその後の... 物... 余の... 九

東橋原製

り。高田學長市島前理事を始め教職員及び高等豫科學生堂に満つ。

先づ鶴に故田原高等豫科長の功勞を表彰せんため、本校に於いて其の肖像額面を製作すること、なりたる。その肖像が今回出来上りたるに就き、茲に其の追悼會を開催すること、なりたる旨を宣し、且つこれより其の除幕を行ふに就き、一同起立敬禮せんことを望む旨を告げ、

正面高く掲げられたる肖像額面を蔽ひたる白布を取除かる、や、一同起立敬禮を施すと共に之を仰視すれば、端嚴なる田原科長の肖像生けるが如し。安部科長、更に... 故田原科長の人と爲り勤嚴にしてしかも寛大の徳を備へ、人に接するに親切を以てす、其の校務を視るやオーソリチーに居らずして、常に虚心坦懐衆の言を容る、の雅量あり。眞に欽仰すべき教育家の人格たりしこと

を説きて、悼惜の意を述べられ、次に高等豫科學生總代大竹健作氏、柔道部總代遠藤盛彌氏、青年正義會總代松枝徳麿氏順次弔文を朗讀し、次に校友代議士早速整爾氏

冒頭先づ自分の校友としての關係以外、同郷の縁に因りて門下生たるの特別關係を以て親しく田原先生の恩顧を受けたる者なることを説きたる後、勤嚴、方正、實意、眞面目等の言葉眞に以て其の人格性質を説明するに足ると斷じて、平素の言動を詳悉し、尙ほ研究心の深く且つ堅く堅忍不拔の概ありしに、不幸過度の勉強害を爲し、研究の大成を見ずして恨みを九泉に齎して遠

逝せられたるは悼惜の至りに堪へずと慨し更に故先生の教を受けたる吾等後輩門下生たる者自奮自勵以て將來の向上進修に努むるあらん、希くは故先生の徳に報ゆる道たと結び、次に前理事市島謙吉氏

諸君、田原君の御肖像を作りますに就きまして、昨年押詰りましに時分に、或人が参りまして、額



故田原科長肖像額面寫眞

たことを實は昨今の如く考へて居りましたのに、指を屈して見ますれば、最早半年以上も経過して居るやうな譯でありまして、此追悼會に臨みまして、當時を追憶致しますと、復た重ねて私の憂を深くする次第であります。唯今諸君に向つて、何等かの御話したいと存じますのであります。が、いつも私は此友人の追悼の會などに臨みましては、平素も其の訥辯でございまして、いろ

りに私に交渉を致しましたが、其の後のいろ／＼な難事の爲めに其の出来上りましたことを存じて居りませぬ譯でありまして、今日久振りに學校へ出て参りまして、其出来上りました額を此所で拜見すると云ふやうなことであります。今日御出席になつて居ります田原君の未亡人に對しまして、久しく御無沙汰を致して、居ることを先刻も御話した位なことでございまして、殆んど一月以來、選舉と云ふことの爲めに忙殺せられてまして、随つて田原君の御亡くなりになりまし

今日又何等かのことを申上げますに付ても、何を申して宜いやら甚だ感ふのであります。一體私と田原君との間柄は、非常に久しいので、後に御話になります學長も同様であります。明治九年かと存します、即ち田原君に、始めて御目に掛つた時は、明治九年だつたと思ひますが、帝國大學で學生の募集のありました時に、全國から寄合ひました其内に、廣島から見えられた方も澤山ございました。其内には、先刻早速君の御話中にもありました下瀬雅允君、之れは私共は後に

承知しました人でありまして、其時分の工部大學、工學寮と申しましたと思ひますが、其工學寮へ入られたのが下瀬雅允君であります。私共と共に、今の帝國大學の前身の東京大學、其前に開成學校と申しましたのが改稱された頃であつたと存じます。之れへ入られた中に山田一郎、即ち此學校に深い關係のありました故山田一郎君や、それから高原貞三郎と申す之れは參謀本部に居り、今日は農商務の技師が何かして居られますが、是等の人々と東京に來られて、共に這入りまして、今日に至る迄の關係であるのであります。先頃亡くなられました迄の間の關係でございまして、殆んど大抵の事に付きましては、田原君と歴史を同じうして居ると云ふ次第でございまして、随つて今日の如き席に於ては、いろ／＼申上げたいことは無いのであります。併しこれを申上げて宜いか、殆んど取捨に苦むと云ふ次第であります。併し此次に學長は田原君の學校に關係されましての種々なことを御話になると想像致します。故に、私はまづプライベートの方面を御話しようと思つて見たのであります。是れとても其範圍がいろ／＼ありまして、之れも取捨に苦むことから致しまして、一つ考へ付きました事があるものであります。先づ其一つを御話して見ようと思ひますのであります。夫れに付いて一寸御断りをして置きますが、斯様な追悼會の場合殊に學校に於ける追悼會でございまして、其御話を致しまするに付いても、多少教訓の意味のあることではなからぬと存じますのであります。殊に田原君の性格から考へて見まして、斯様な事柄に關れます方が宜からうと思ふのであります。又もう一つ、此故人に對しまして、故人の平素考へて居られた最も大切な事に觸れて見たいと云ふやうな念も少し有つて見たのであります。之れは一寸餘計な言葉のやうでありますけれども、折

角此肖像を拜しまして、田原君の心事に多少立入つて見ると云ふことも、亦故人に對して然かるべきことでないかと云ふやうな考も有つて見たのであります。或は斯様なことに觸れますと、故人に對して無禮なやうなことも當るかも知れぬのであります。併ながら友人なる私が、空しく唯誰でも知つて居るやうなことをばかりを述べましたので、恐らく地下に居られる、田原君は餘り御満足ではないか知らぬと思ふ。であるから、寧ろ之れは田原君の心事に立入つた、殆んど田原君が言はんと欲すること、言はんと欲して言はれないことに觸れて見るとどうであらうかと考へたのであります。何だか斯く申すと、甚だむづかしい事のやうでございませぬが、併ながら申して見ると格別むづかしいことではない。

一體申す迄もなく、田原君は頗る謹直な方でありまして、自分の意中にあることは、大抵の人ならばバツバと言ひます事柄も、なか／＼言はれぬ人である。殊に自分の長所或は誇るべきことなどに付きましては、頗る抑へて申されぬ人でありまして、田原君の心事に付きましては、餘程深く交はり居りました者でないと思ふ。事多しやうに思ふのであります。そこで、私が田原君の心の底を叩いて、諸君に對して御話をすると云ふことも、徒らに唯其心事を暴露して快とする譯ではございませぬので、之れが教訓になると信じて申すのであります。之れを語つて其言葉に當るが當らぬかは分りませぬが、若し言葉に當つたとしますれば、故人も必ず微笑を含んで喜ばれることであらうかと思ふのであります。夫れはどんな事であるかと申すと、私は田原君の一生の恨事は何にあるか、即ち一生の恨みとして居られたことは何であるかと云ふことを申したいと思ふのであります。田原君の終生の恨みとして居られたことは、何であるかと云へば、先生は一口に

大なる抱負があられたのであります。其大なる抱負と深き希望とを發揚するに至らずして地下に入られたことが、恐らく故人の最も深き恨みとせられることであらうと私は深く同情を寄せざるのであります。私は想つて茲に至りますと、實に落涙を禁じ得ないと申すのは、一體田原君は、學問の經歷に於ては頗る不幸な人であるのであります。それに付いて大體を御話しなければならぬのであります。私が先刻特にいへば、申上げましたのは其爲めてでありまして、私が故人に御話をし、之れを言つて見たいと思ふ所以は、之れが教訓になると信じて申すのであります。田原君の學問の經歷に付きまして不幸であられたと云ふことを申上ぐる第一として、田原君は大學に於ても秀才の人であつたのであります。何事に付いても秀才たることを失はなかつた人でありました。然るに不幸にして、田原君は將に卒業に近付きました時分に、餘程強い腦病に罹られたことがあつたのであります。迎も學業に勉強することが出来ぬと云ふ不幸が起りまして、夫れが爲めに停學の止むなきに至つた。爾來郷里に歸られて、極めて簡單なる教育の衝に當られたことが數年であつたのであります。それが即ち田原君の學問に於ての一の不幸と私が申す所以であるのであります。君が終生忘れられない所の恨みと申したのは、即ち之れであるのであります。君は、折に觸れて我々に申されたこともありますが、併し、謹押の人決して多くを語らぬ譯でありまして、私共徒らに其意中を推測つて居りました位でありませぬが、いつも痛切に、私共此點に付いて同情を寄せ居つたのであります。君は此帝國大學を卒業するに至らざりしと云ふことを餘程強く考へられて居つた譯でありまして、これから追々申上げられて、之れを以て殆んど大なる恥辱と考へられて、一生の内に、可憐な方法を以て之れを償ふにあらざれば

居ります。御令息の御話に依つて見ますと、何時も其答案は満點に近い點を得て居られる。一番最後には、十分に研究の積んだ答案が出来た。それは草稿であるから、書直しさへすれば、向うへ發送が出来ると云ふ時に當つて病に臥されたのであるが、御令息達には、どうも夫れを書直して、俺が死んでも、向うへ送つてやれと云ふ遺言があつたと云ふことを伺ひました時は、ア、／＼相變らず務められたものであると思つて、私は實に涙の潸然たるを禁じ得なかつたのであります。實に君の研究と云ふものは一貫して居る。此自奮の

止まずと迄血涙を呑み、此事を恨みとせられて居つた譯であります。

地方に歸つてから、中學校の先生をして居られたと思ひますが、本校が出来ました時に、君は郷里から迎へられて、此學校の衝に當られたと云ふことは、此學校の歴史に残つて居ることでありませぬが、今更編纂する必要もありません。其際に於て、丁度先刻早稲田君が御述べてになりました所へ移るのではありませんが、今の丁度牛込區後所のあの附近の單筒町と申す所の一角に、小さな格子戸の立つた家があつた。今日は未亡人も御出席でありますから、定めて追憶の御感があらうと思ひますが、あつた故人が住居せられた。其時分は、即ち此學校の振ひませぬ、極めて難澁な時代でありまして、君はあつたから學校へ通つて居られたのであります。其學校へ通はれた後、後の仕事と云ふものは、先刻早稲田君の述べられた如く、研究であつたのであります。私の考へますに、此研究時代と云ふものは、君には最も大切な時でありまして、幾多の發明は皆其時代になつたのであります。漆の發明と一口に言へば簡單のやうであります。私共嘗て故人の爲に説明書などを書いた覚えが、特許を得て居られる種々なものが出来まして、殆んど二十何種と數へる程であつたと自分は記憶して居る。斯様に種々の工風をなされたが、固より之れは單筒町時代に起りましたものでありませぬ。其發明の爲めには、今日茲に御出席になつて居る未亡人などの御話に依りますと、熾燼の火をおこす、或は其發明品の藥劑に觸れると云ふやうなことで、手に火傷をした。後にはそれが癩癩するに至つたと云ふやうな酷いことも起つた。御宅へ飛出たして、故先生の未亡人に御目に掛つて見ますと、頭は始終灰だらけと云ふやうな斯様な状態が、永く續きました。斯様に非常な勤勉努力をせられたに違ひないけれども、私から見ますと、帝國大學

學を卒業せし終つたと云ふことの恨みの上からして、斯様な勵みの起りましたことと信ずる。勿論そればかりではない。一體が非常な勤勉な性格の人ではありますけれども、此一の恨みが如何なる場合にも發したものと信じて居るのであります。

そこで、私共思ふに、若し此單筒町時代の如き研究が將來も續きましたならば、君は必らず下瀬雅允君の發明に對しまして遜色のない丈けの大いなる發明もあつたらうと思ふのであります。又學術界に大名を博すと云ふことは、強う下瀬君に譲らないものであつたらうと思ふのであります。君に譲らないものであつたらうと思ふのであります。君が出來て來ますと、其發明を實地に行つて見なくならぬ。茲に於て、事業と云ふ形のこと

ありまして、即ち此所へ復歸されました時には、此學校もな／＼大きな規模になりまして、高等豫科長として先生を迎へられたのであります。それから、爾後青英の爲に盡されたことは、私が特に言ふ迄もないのであります。此學校の最も多數なる所の學徒を卒らされて、始終それに向つて勤勉努力、學校にどれだけの功を盡されたかと云ふやうなことに付きましては、今更申す迄もない。之れ程著名な事實はありませぬが、尙ほ其外に、之れも私が先刻申上げましたことは、接續する

向つて言はれるに、俺が帝國大學を卒業するに至らなかつたから、せめては自分の小供をして帝國大學を卒業せしめなければ止まぬと云ふことを言つて居られた。之れを考へて見ますと、君の一生の恨事と云ふものは、當時青英に志す者の登龍門であつた帝國大學を卒業し得なかつたと云ふことが、何處迄も付いて廻り、其深さと云ふものが實に案外深いものであると云ふことに驚かざるを得ないので、實に之れは敬服すべき點であると思ふのであります。

せぬし、又幾ら研究を積んでも自から足らずと謙遜して居られる其態度に對しまして、實は言出す機會もなかつたのであります。今日に於て考へて見ますと、實に残念至極の譯である。あの位に積まれた學力と云ふものを誰も知らない間に埋没し去り、而も其一生の恨みとせられた所のものを取返して、之れで先づ愉快であると斯う言はれることの出来なかつたことは、返々々も残念に堪へないのであります。併し令嗣が卒業に近付されました半年ばかり前に、故人も逝か

れた譯でありますから、先づ之れに向つて一安心

心の底を叩いて、諸君に對して御話をすると云ふことも、徒らに唯其心事を暴露して快とする譯ではございませぬので、之れが教訓になると信じて申すのであります。之れを語つて其肯綮に當るか當らぬかは分りませぬが、若し肯綮に當つたとしますれば、故人も必らず微笑を含んで喜ばれることであらうかと思ふのであります。夫れはどんな事であるかと申すと、私は田原君の一生の恨事は何にあるか、即ち一生の恨みとして居られたこと(は何であるかと云ふことを申したいと思ふのであります。田原君の終生の恨みとして居られたことは、何であるかと云へば、先生は一口に申しますると、學問上と對しまして、深き希望と

原君の學問に於ての不幸と私申すのであります。君が終生忘れられない所の恨みと申したのは、即ち之れであるのであります。君は、折に觸れて我々に申されたことありましたが、併し、謙抑の人決して多くを語らぬ譯でありまして、私共徒らに其意中を推測して居りました位でありまして、いつも痛切に、私共此點に付いて同情を寄せて居つたのであります。君は此帝國大學を卒業するに至らざりしと云ふことを餘程強く考へられて居つた譯でありまして、これから追々申上げますが、之れを以て殆んど大なる恥辱と考へられて、一生の内、何等の方法を以て之れを償ふにあらざれば

られる種々なものが出来まして、殆んど二十何種と數へる程であつたと自分は記憶して居る。斯様に種々の工風をされたが、固より之れは單箭筒時代に起りました丈けでありませぬ。其發明の爲めには、今日茲に御出席になつて居る未亡人などの御話に依りますと、焔爐の火をおこす、或は其發明品の藥劑に觸れると云ふやうなことで、手に火傷をした。後にはそれが糜爛するに至つたと云ふやうな酷いことも起つた。御宅へ罷出てきて、故先生の未亡人に御目に掛つて見ますると頭は始終灰だらけと云ふやうな斯様な状態が永く續きました。斯様に非常な勤勉努力をせられたに違ひないけれども、私から見ますると、帝國大

向つて言はれるに、俺が帝國大學を卒業するに至らなかつたから、せめては自分の小供をして帝國大學を卒業せしめなければ止まぬと云ふことを言つて居られた。之れを考へて見ますると、君の一生の恨事と云ふものは、當時青雲に志す者の登龍門であつた帝國大學を卒業し得なかつたことと云ふことが何處迄も付いて廻り、其深さと云ふものが實に案外深いものであると云ふことに驚かざるを得ぬので、實に之れは敬服すべき點であると思ふのであります。

ありまして、即ち此所へ復歸されました時には、此學校もなかに大きな規模になりました。高等豫科長として先生を迎へられたのであります。それから、爾後青英の爲に盡されたことは、私が特に言ふ迄もないのであります。此學校の最も多數なる所の學徒を卒らされて、始終それに向つて勤勉努力、學校にどれだけの功を盡されたかと云ふやうなことに付きましては、今更申す迄もない。之れ程著名な事實はありませぬが、尙ほ其外に、之れも私が先刻申上げましたことは、接續することでありまして、此高等豫科を卒らして居られます其傍らに、君は相變らず研究をやられて居る。研究をやられたが、さて之れは誰も知らぬのである。君は嘗て人に向つて其事を言はれな

居ります。御息の御話に依つて見ますると、何時も其答案は満點に近い點を得て居られる。一番最後には、十分に研究の積んだ答案が出来た。それは草稿であるから、書直さなければ、向うへ發送が出来ぬと云ふ時に當つて病に臥されたのであるが、御息達、どうや夫れを書直して、俺が死んでも、向うへ送つてやれと云ふ遺言があつたと云ふことを伺ひました時は、ア、ア、ア、相變らず務められたものであると思つて、私は實に涙の滯然たるを禁じ得なかつたのであります。實に君の研究と云ふものは一貫して居る。此自奮の念は、何處から出たのであるかと云ふと、一體君の性格から起つて居るには違ひございませぬけれども、君が平生言はれる所から私に付度しますると、唯帝國大學を卒業しなかつたことを終生の恨とせられた。其恨が何時迄も忘るべからざる所の恨となつて、君の自奮力と云ふものを始終刺戟したと云ふ結果が、終始一貫研究、三十餘年の間、人の知らない、又少しも人に向つて語ることなくして、此研究を續けられたと云ふことに歸著するのであります。

私に田原君に向つて、實に同情に堪へませぬけれども、斯様な事が動機となつて、始終自奮力を刺戟せられて研究を積まれた其學問の度合と云ふものは、少なくとも博士以上の者があるのであります。君の教育上に注がれた力と云ふものは、更に世の中に立つて居られる多數の博士以上のものであると云ふことは言ふ迄もないと思ひます。所が、先生は殆んど死に瀕する迄も、自から少しも満足して居られぬのである。尙ほ年を懸き、而して研究に研究を積んだ上に其研究の結果を世の中に表はして、自分の抱負自分の志を一度は世の中に發揚することも期して居られた譯であります。その事に至らぬ内に亡くなられたと云ふことに付きましては、諸君と共に私は深く田原君の爲に嘆かざるを得ぬ次第であります。此點に於きましては、實に同情に堪へないであります。博士と云ふが如きは人の爲の學位であります。博士と云ふが如きは人の爲の學位であります。博士と云ふが如きは人の爲の學位であります。博士と云ふが如きは人の爲の學位であります。

せぬし、又幾ら研究を積んでも自から足らずと謙遜して居られる其態度に對しては、實は言出す機會もなかつたのであります。今日に於て考へて見ますると、實に残念至極の譯である。あの位に積まれた學力と云ふものを誰も知らない間に埋没し去り、而も其一生の恨みとせられた所のものを取返して、之れで先づ愉快であるとする言はれることの出来なかつたことは、返す／＼も残念に堪へないのであります。併し令嗣が卒業に近付かれました半ばに、故人も逝かれた譯であります。先づ之れに向つて一安心あつたこととは存じます譯であります。が、まだ田原君の期せられた所は、いゝ／＼な抱負もあり志もあつたことだらうと思ひます。

へも之れを知らなかつたことは、實に長いことでありまして、嘗て或時に、君は此頃何をして居られるかと聞きまして、私は近頃斯う云ふものを讀んで居ると云ふ話を聞いた。所でそれは何時頃から始めて居るかと云ふと、三年前前から始めて居ると云ふのであります。其研究の深さと云ふものは、勿論推測することの出来ることであつて、なかに深く研究致して居られたのであります。そこで、復た其後に先生が更に大なる研究を始められたと云ふことに付きましては、之れ又私の少しも存じませぬで、亡くなられました時に始めて聞いて驚いたのであります。君の宅へ行つて見ますと、私共嘗て知らないラボラトリーが出来て居りました。夫れに日々閉籠つて、ゴッ／＼研究して居られたと云ふことを未亡人や令息から承はつたのであります。君は師として仰ぐ者がなくと云ふ點から致しまして、又師を求めると云ふことが不便であると云ふ所から致しまして、近頃西洋で頻りにやつて居ります通信教授、此方法に依つて、君は頻りに答案を作つては西洋へ送つて其批評を求め、之れが殆んど受せらるゝ時に迄至つて

尙ほ夫れに附加して、同じ事柄を申すのであります。君は一人迄あらねば、之れは何れも秀才である。令嗣武夫君は嘗て此早稲田の中學に學ばれ、今は帝國大學にあつて、丁度其卒業試験の最終の日か何か今日に當つて居ると云ふこととあります。其次、又其次、又其次と、更に三人居られますが、何れも秀才である。田原君は早稲田大學の創立から當られた人でありまして、其自分が帝國大學を抜けたと云ふことを一生の遺憾とせられて、是非帝國大學へ自分の小供を入れて卒業させなければならぬと云ふことを心に固く誓つて居られたと見えます。即ち第一第二第三の令息共に、皆此帝國大學へ入ると云ふことの豫定になつて居ります譯で、君は平生私に

私に田原君に向つて、實に同情に堪へませぬけれども、斯様な事が動機となつて、始終自奮力を刺戟せられて研究を積まれた其學問の度合と云ふものは、少なくとも博士以上の者があるのであります。君の教育上に注がれた力と云ふものは、更に世の中に立つて居られる多數の博士以上のものであると云ふことは言ふ迄もないと思ひます。所が、先生は殆んど死に瀕する迄も、自から少しも満足して居られぬのである。尙ほ年を懸き、而して研究に研究を積んだ上に其研究の結果を世の中に表はして、自分の抱負自分の志を一度は世の中に發揚することも期して居られた譯であります。その事に至らぬ内に亡くなられたと云ふことに付きましては、諸君と共に私は深く田原君の爲に嘆かざるを得ぬ次第であります。此點に於きましては、實に同情に堪へないであります。博士と云ふが如きは人の爲の學位であります。博士と云ふが如きは人の爲の學位であります。博士と云ふが如きは人の爲の學位であります。博士と云ふが如きは人の爲の學位であります。

せぬし、又幾ら研究を積んでも自から足らずと謙遜して居られる其態度に對しては、實は言出す機會もなかつたのであります。今日に於て考へて見ますると、實に残念至極の譯である。あの位に積まれた學力と云ふものを誰も知らない間に埋没し去り、而も其一生の恨みとせられた所のものを取返して、之れで先づ愉快であるとする言はれることの出来なかつたことは、返す／＼も残念に堪へないのであります。併し令嗣が卒業に近付かれました半ばに、故人も逝かれた譯であります。先づ之れに向つて一安心あつたこととは存じます譯であります。が、まだ田原君の期せられた所は、いゝ／＼な抱負もあり志もあつたことだらうと思ひます。

であり、實は此田原君の家庭の狀態と云ふものは、私は最もよく承知して居る譯であり、横濱に於きまして、火災の爲めに田原君の財産と云ふものは、一夕の間に皆烏有に歸した。殆んど着の身、着の儘で逃げられたと云ふ位な有様であるのである。爾來田原君の家庭に於きましては、財産など云ふものは何もない。併ながら、何もないが他より以上の財産があると云ふのは、即ち先刻私が御吹聴申上げました四人の御令息が財産である。田原君は他の財産は欲くない人である。自分の小供さへ宜くすれば夫れが財産だと思つて居られたのである。又之れ程宜い財産はないのである。田原君として嘗て誇られることはないが、確に誇つて宜い財産を持つて居られる。

令嗣は今や帝國大學を卒業し掛つて居る。其他の御小供達も悉く帝國大學を卒業して見せると云ふ其希望の通りになりつゝあるのではありませんから、之れほど宜い財産はない譯であります。令嗣令息達は、斯様な撫育を受けられた譯であるから、勿論私が申す迄もないことではありますが、必ず故大人の教を服膺せられた譯で、之れからは益々御奮勵にならなければならぬと思ひます。又令嗣令息と殆んど同様の關係にあられる諸君に於きまして、同様のことであらうと考へまするやうな譯でありまして、唯私は故人に對する所感を申したのでありまして、いゝ勝手なことを申して御無禮になつたか知れませぬが、併ながら、友人の友誼と云ふものは斯様なものであると云ふことを故人も御察し下さらうと思ふ。徒らに友人の美點ばかりをさらけ出して、少しも其缺點を言はぬと云ふが如きは、之れは友人として何だか心に濟まぬ譯であります。私の如き露骨の性質、殊に謙しつと云ふことを有しませぬ者は、いろいろの點に於て失禮でありましたと思ひますが、其點は田原君の靈に對して御詫を致し、又諸君に甚だ謝らぬことを申上げましたことを謝します。

と述べ終りて悼惜悲痛措く能はざるも、如し次に學長高田早苗氏

先刻來、吾輩の最も親しき友人たる田原君、此人のことに就いて、早速君市島君其他から種々御話がありました。最早私が蛇足を加へる必要もないやうに思ふ。加ふるに、近來少し身體が悪く、殊に今日は氣候が悪いので、多少心持も好くないのでありますから、簡単に一場の御話をして御免を蒙らう。昨年の四月十二日に此東京を立つて、歐米漫遊の途に上りました時は、田原君は健在の人であつた。而して漫遊中に屢々田原君の所へ書を寄せまして、原君からも亦屢々書を寄せられたさうであります。所が、妙なことで、届先の書方が違つた爲めに、一本も私の手許へ達しない。歸つて來て、其手紙を始めて開いて見たやうな譯であります。さう云ふことも即ち長く遇つての出来なくなる。前徴であつたとも言へませうが、而して亞米利加へ最後に行きまして、ドクトル、エドワート、モースと云ふ一個の年若いサイエンスに遭ひました。之れは私共學生の時分に、田原君と同じ學生であつた時分に、日本へ來られた。今でも有名な動物學者であります。其當時から、名高い動物學者である。始めて日本に進化論、ダルウインの説を讀めた人でありました。其老人にホストンに於て遇ひまして、いろいろ田原君の噂を其老先生と共にしました。此人は、餘程田原君には縁の深い人であります。私は其モースと云ふ人といふ、冗談を言つたので、あなたは進化論を日本へ輸入してボタレ、陶磁器を日本から輸入した人だと言つて笑つたのであります。即ち日本に居られる時分、陶磁器の研究を傍らつた。西洋人に陶磁器の研究をされた第一人である。全國を廻つて、いろいろ陶磁器を集めて歩いたものだ。其時に學生たる田原君がモース先生に付いてゐた。餘程古い話で、三十

餘年前と云ふ昔話であります。其時名古屋の或る宿屋へ泊つた所が、そこで菓子盛つた皿が出た。それを見てモース先生が、之れはどうも古いのだと云つた。所が、宿屋の娘さんが給仕に出た居て、之れは新しいものです。イヤ之れは古いものだ。之れは新しい。頻りに問答を始めた。終には此問答も面倒になつて來たから、田原君が通譯の任に當つて、段々聞いて見ると、モース先生は陶器を集めて居る人だから、其菓子の入物が古いのを見て頻りに褒める。宿屋の娘の方は出した菓子が古いと言はれたのだと思つて、頻りに新しいと言つて辯解をしたと云ふことが分つて、大笑をしたと云ふ話をモース先生から聞かされた。其話は昔で田原君に昔聞いた話である。恰も符節を合すが如くて、其事で急に田原君をまた想ひ出して、繪がきを出した。其時分田原君は最早病つて居られたのだが、自分は少つとも知らない。跡で聞くと、其手紙の届かぬ内に此世を去られた。

桑港へ來ますと、始めて私の妻からの手紙で、田原君が大分悪いと云ふことを知つた。それから船に乗りまして、あそこに居る橋君と田原君の噂をしつゝ、どうしたらうと心配をしつゝ、來た。太平洋を船に乗つて居る間ぢつたたく堪らない。丁度日本へ着く三日か四日前、此所から無線電信が届くと云ふことを船長が言つて呉れましたから、そこで、無線電信で田原君は生きて居るか聞いて、所が、もう死んでしまつたと云ふ返事が船の中へ來た。そこで始めて、此私の舊い親しいく友達、が死んだことを承知した譯である。實に感慨無量、何と云ふ言葉もない譯でありました。

唯今、市島君から、即ち矢張り舊き友垣の一人であります。段々田原君の事に付いて御話があつた。一々其通りである。全く田原君の學生で居られた頃、私共が帝國大學即ち東京大學を卒業する前後と云ふものは、其學校が日本に於ける唯一の大學である。其時分は早稲田大學は無し。慶應義塾はあつたが慶應大學は無い。慶應義塾はあつた所て變則の教育をするに過ぎない。それで、此唯一の東京大學を卒業するが、しないかと云ふことは將來の運命の岐れ目である。登龍門を登れるか登れないかと云ふ譯である。所が、田原君は途中で腦病になつて、最も有望なる秀才が到頭卒業が出来なかつたと云ふことである。其時に思ひ込んだことを、田原君は一生生涯痛切に感じた。一體田原君は一本氣の人であります。一本氣の人です。終ひまで其事を思詰めて居たらうと思ふ。

市島君は學校方面の話を私に聞かすだらうと言はれたが無論少しかりします積りでありましたが、餘り長くては、却つて諸君の御迷惑にもならうから、簡単に御話する。すれば幾らでもある。實に思ひ出の多い話は數限りなくあるのであります。丁度今から三十年前でありまして、其時に始めて東京專門學校が出来た。其時の學校は向ふの文科の教場の而かも半分しかなかつた。其時分の東京專門學校は、あの文科教室と書いてある所の半分であつたのであります。開校當時から我々は先生である。私共は帝國大學卒業生、文學士高田早苗と云ふなか、威張つたものである。其時分田原君は、我々と違つた方面から來た。前に御話した通り、大學へは同じ時に這入つたが、卒業が出来なかつた。田舎へ往つて、先生になつてしまつた。所が、此東京專門學校の始めての校長の大隈英麿君が、誰かから田原君と云ふ秀才のあることを聞かれたのでせう。直に招かれてやつて來て、そこで、我々は始めて田原君も矢張り此所の先生になるのだと云ふことを知つた譯である。それから始めての學生を募集した時に、私と田原君が一緒に試験委員をやりました。其學

と傳へる事、熱く扱はんとす。杜撰のところあり。おめおめと云ふ。口舌をうらむ。金輪寺と云ふ。又那じも内通を入。と云ふ。其點は田原君の靈に對して御詫を致し、又諸君に甚だ謝らぬことを申上げましたことを謝します。

と傳へる事、熱く扱はんとす。杜撰のところあり。おめおめと云ふ。口舌をうらむ。金輪寺と云ふ。又那じも内通を入。と云ふ。其點は田原君の靈に對して御詫を致し、又諸君に甚だ謝らぬことを申上げましたことを謝します。

○友人志賀重昂地を攻め入りて義をぬぐふるも
 米田テキサス獨立の史を後み其のアラモ役は、
 一軍ゆとりて節に殉じしボナム、重圍
 を脱し七外に援軍をもひりて事蹟の老長降の
 没に鳥居強右衛門、困を脱し後余、節に
 殉じしと東西砲をともる其の義烈の地
 と甚むお似ゆる思ひあり遠般の事、殊味を
 了る氏とて、石を鳥居の如く、取らざり
 らずと姑しん刻せしえんをテキサス州サント
 ニオスに於けるアラモ寺の古蹟を、建てる、此の
 おしりらき、事、改、此、事、の、可、
 け、不、六、島、地、末、志、賀、氏、の、事、を、

東本
 西本

アラモの戦

注意

大正四年四月十六、十七、十八日、愛知縣岡崎町に於て家康忠勝兩公三百年
 (鳥居強右衛門が家康公に長篠の危急を告げたる處)にアラモの記念を掲げ、

▲テクサス國サン・アントニオ町アラモ寺 主將 ウィリアム・バーレット・ト
 △日本參州設樂郡長篠城 主將 奥平九八郎貞昌(後、信昌) 齡二十二歳。

▲テクサス軍小勢なれば、ケンタッキー州のデーヴィッド・クロケット、南方口
 して來る。

△長篠軍小勢なれば、參州五井の松平彌九郎景忠、同竹谷の松平又七郎家忠、

主將トレーヴィス、アラモ寺の頂に上り「目
 標 櫛林の左に現はれたる敵 一千二百呎
 狙へ 撃テ」。ズドーン。
 「撃方止メ」。

寺員より下り、トレーヴィス、一同に向ふ

自由及び獨立の爲めに奮戦して米合衆國を創
 造したる華盛頓將軍の第一四年の誕生日な
 り、此の吉日に恰も開戦せしこそ何かの天啓
 と云ふべけれ、イデ諸君テクサスの自由の爲
 め獨立の爲め奮戦せしよ、終りと。應

とを伍
 副將バ
 四人、
 も人數

折衝の起つて、主將の其の、
 推し、
 主將の、
 此、
 此、

米國テクサス州サンアントニオ市アラモ寺に建立せるテクサス獨立戰役殉難烈士の碑

碑高サ六尺、幅二尺(花崗石)

●●●米國の長篠城●●●

TO THE MEMORY OF THE HEROES OF THE ALAMO

敵五千我百五十 彈盡況又絶糧粒 三十二人間急馳 飛刀亂斫冒圍
入 入見將軍血被面 兵皆露刃嬰壁立 誰哉南加一男子 見義不為
固所恥 疾馳白馬又入圍 握手笑曰與君死 裏瘡復戰氣益振 不說
睢陽有張巡 百八十二人駢屍 生而降者無一人 二十四郡舉感義
初知人和勝地利 天塹百里何保障 河北遂歸唐天地 我今海外經九
譯 萬里下馬安敦驛 爛漫夾竹桃滿地 恍疑當年劍血赤 君不見張
巡許遠南霽雲 貞風于今吹芳芬 西俗未必忌降服 斷頭將軍所不聞
寧期阿墨洲盡處 忽見斷頭勇將軍 意氣豈有東西別 莫怪葡萄酌
哭君 且磨日本所載石 淋漓為勒旌列文
西曆一千九百十四年九月 日本 志賀重昂譯又建

Prof. Shigetaka (Jukō) Shiga, Tokyo
San Antonio, Texas
September, 1914

サン・アントニオ市は紐育將た桑港より各々約二千哩、米國と墨西哥との境界近くにあり

●●●日本のアラモ●●●

(註)

Province of Torii, of Japan, Nagashino of Japan.

此石於日本鳥居強右衛門故土

兵に會つた、馬上優に、鷹揚とクイダードニ
 (警戒せよ)、「ノー、セア、ネグリヘンテ」(油
 斷するな)と西班牙語にて叫んだ、敵兵は、
「シー、セニオール(然り君よ)と答へた。かく
 すること二回、サン・アントニオ川より三哩、
 も早く御

でに、此酒携へ歸るべしと云つた。然らばと
 ファンニンは残り少なげなるを四瓶まで取出
 し、藁にて心盡くしに包み、ボナムの馬鞍に
 忠々敷結び、且つは途中辨當の代はりにとビ
 スケット五袋を鞍囊に入れた。ボナムはフア

遠南霽雲 貞風子今吹芳芬 西俗未必忌降服 斷頭將軍所不聞
 期阿墨洲盡處 忽見斷頭勇將軍 意氣豈有東西別 莫怪葡萄酌
 且磨日本所載石 淋漓為勒旌列文
 曆一千九百十四年九月 日本 志賀重昂謹又建

Prof. Shigetaka Sar

サン・アントニオ人口十三萬
 紐育將た桑港より各々約二千哩、米國と墨西哥との境界近くにあり
 日本のアラモ

依、條、勝、兵、十、一、拜、の、に、一、が、ば、を、馬、な、る、時、ホ、黄、木、芽、

Stone
 from the native province of
 Suncemon Torii.
 The Bonham of Japan,
 in the province is Nagashino.
 The Alamo of Japan.

此石於日本鳥居強右衛門故土
 所獲

日本 北條時雨 書
 日本 酒井孫兵衛 刺

旅巡の大將振、南霽雲の使命と殉

して義に殉じたるは頓丘の南霽雲なり。長篠

乞ひに出で而して義に殉じたるは南カロライ
 洋人の嘉する所は即ち

碑面拓本をもととして奥と成しやうし加紀
 以馬場町(志賀氏の所領)家原忠勝三郎
 宗と云ふ所の石代に指さるる長條城の石を
 七報し 馬場城の石垣に末玉の古條をア
 うも比念の碑 拓本を掲げ以つて東西を
 の契をえと云しやうとアウモ成りた案を後
 今印刷物に修するときは若干を添へて
 紙でんを此の中へねらる碑の拓本二枚
 即ち其印刷物中のもの也 志賀氏の建碑古
 業と云世に代わく又の石味の古方と云
 二枚へす (大正四年五月廿七日)

○五月廿九日徳川侯爵義親尾州牧(石代

東林堂製

の石を物教とて帝大山の上の石を借り交
 け拓列 石代とてある由を得たり(石代
 行きえの傳へ修し拓列不にある和書
 如くして拓列と云ふ、後つて拓列を
 源氏物修三書挿修の割る所の味極
 一し 詞書と云ふ、又りて云ふこと
 石原代の石筆と見えしことなり此三書
 定ふ、原書と云ふ、西行物修不ある
 物修拓列と云ふ味極し、古書の筆
 とも傳書と云ふ、拓列と云ふ、拓列と云ふ、
 し其の代々の代書と云ふを、矢はす、
 拓列と云ふ、拓列と云ふ、拓列と云ふ、

目錄

源氏物語繪卷 三卷

甲卷は詞書筆者飛鳥井雅經卿乙丙の兩卷は詞書筆者寂蓮法師畫者隆親と鑑定しあれど確證なし書畫の様式より之を察するに藤原後期の作物なるは疑なきが如し畫は三卷とも一筆なれど詞書は一卷の中數筆に分かるゝものあり此三卷何れも内容連續せず甚たしく前後したる所もあり想ふに中古一たび散佚したるを更に取り集めて斯く三卷となしたるものか今ま各卷の内容を記せば左の如し

- | | | |
|--|-------|--------|
| 甲 卷 | 乙 卷 | 丙 卷 |
| 第一段竹河 | 第一段横笛 | 第一段早嶽 |
| <small>此の段の詞書の前に
來るべき十行の文は
乙卷の始めに入れり</small> | 第二段柏木 | 第二段寄生木 |
| 第二段竹河 | 第三段柏木 | 第三段寄生木 |
| 第三段橋姫 | 第四段横笛 | 第四段寄生木 |
| 第四段蓬生 | | 第五段東屋 |
| 第五段關屋 | | 第六段東屋 |

因に云ふ源氏繪卷の古代なるものにて世に知られたるは此三卷の外に益田孝氏所藏の一卷あるのみなり其卷は夕霧一段鈴虫二段御法一段を收めり

西行物語繪卷 一卷

西行物語繪卷の種類多し此卷は經隆の畫と傳稱するものにして蜂須賀侯爵家所藏の卷と同種のものなり蜂須賀家の卷は西行剃髮後に於ける事蹟を畫き此卷は剃髮前の閱歴を叙したり

之を經隆の畫となすは土佐光貞の鑑定に依るものゝ如く固より確證なし書畫の様式より觀れば鎌倉中期の作となすを當然とす

破來頓等繪卷 一卷

此卷一名不留房繪卷と云ひ其内容不留房と云へる僧か一切の執著を脱して遂に阿彌陀佛の國土に入るを得たりと云ふ説話を取り來りて淨土教思想を鼓吹せるものなり破來頓等とは不留房が之を口に唱へたるに因りて名くるなり

詞書の筆者世尊寺行尹卿なりと傳へたるも畫者に就ては何等の所傳なし製作年代は恐らく鎌倉末より南北朝初期に至るの間なるべし

物語繪卷 二卷

此繪卷二卷を合するも完備のものにあらず其内容は某尼の息女化粧の過ちに因りて發心し母子共に洛北小野の里に庵室を營みて住みわぶる由をものせる一種の小説的物語なり

甲卷の詞書は尊圓親王乙卷の詞書は頼阿法師の筆と記しあれど恐らく非なるべし製作年代は室町時代なるが如し

歌舞伎草紙繪卷 一卷

此繪卷は慶長より寛永に至る頃の歌舞伎の状を寫せるものにて詞書烏丸光廣卿の筆なりとの傳あり畫者に就きては所傳なし
千代姫の光友卿に嫁するや岩佐又兵衛をして婚禮の装具を畫かじめたりと云ふが故に或は此畫も同人の筆にあらずやと云ふものあれど畫風は又兵衛と異なる特色を有す

圓山應舉筆華洛四季遊戯繪卷 一一卷

此繪卷は九條家より贈られしものにして畫は圓山應舉詞書は高橋若狭守宗直題簽は九條左大臣尙實卿の筆する所なり
此畫の下圖は今や東京某氏の所藏に係り之を觀るに應舉か如何に此製作をなすに苦心を凝らしたるかを知り得べし

華洛四季遊戯繪卷

○内經素問のこゝつきの前にも云ふや
仁和寺に在りし書は
影を本とす
刊せり
の同者

内經素問は唐初楊上善の撰にして黄帝素問の註釋の最も古きもの一なり。現在書目には全元起註黃帝素問十六卷を擧げしが、この書は梁時代の著作にして、内經素問より一層古し、しかもこの書は佚亡して今日に存せず。内經素問の著者、楊上善は隋末唐初の人にして、今より約一千三百年前のものにして、支那には既に早く散佚し、我邦にありても平安朝以後に佚亡して、近世多紀桂山(名は元簡、通稱安長)が、醫學館督事の要職を利用し、執政白川樂翁公の力を藉りて、古醫書を蒐集したるときにも手に入らず、その素問識文化三年著、天保八年刊)にも楊上善撰黃帝内經素問三十卷は佚の部に入れ、多紀柳淵の醫籍考にもこの書は佚亡せりと記したり。何ぞ圖らむ、この書が仁和寺文庫に保存せられ、天保の末に、忽然として世に現はれむとは。蓋し素

問の註釋として、世に行はるゝもの唐王氷の次註を始めとして、吳註、馬註等あれどもこれ皆、宋、明以後諸家の訂正を経たるものにて、著作當時の眞にあらざる、楊上善の内經太素が、その當時に我邦に渡り、些も後人の筆を加へられずして、今日にまで傳はりしは實に幸福のことにして、今日現存せるは殘缺二十三卷に過ぎずといへども、その學術上の價值は至大なり。仁和寺文庫に藏せらるゝ本は、一昨年、國寶の列に入りたれば、保存の道に於て、憂ふる所なかるべし。民間に存する數部は、天保年間、仁和寺藏本を影寫せるものにして、余が藏せるものは、小島學古が自から影寫せるものなり。卷二、三、五、六、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十九、廿三、廿四、廿五、廿六、廿七、廿八、廿九、三十を存し、卷一、四、七、十八、二十、廿一、廿二を佚せり。各冊の末尾に、仁安三年丹波賴基寫之の文字と、保元二年丹波憲基校了の文字を記したり、仁和寺本を影寫せしは天保年間にして、今日まで已に六七十年を過ぎたれば、この影寫本にて讀み得べき箇處も仁和寺本にては蝕蝕のために讀み易からざる箇處尠からず。故に、今日に在りては仁和寺古抄本の外に、天保年間影寫本を保存するの道を講ずるも學術上必要の事なるべし。

○菊尾山本榮公致遠一巻を云々

東林堂

砂白具に乗し、赤穂後野の行路を二丈
 どの長尺に、海を唐紙臨後、青きとる
 多の終式の茶書、活彩を施し、
 九も一程の珠味、
 其のつれを、
 ○早稲田の、
 科ある、
 地未と、
 其外、
 十茶田、

万葉集の巻として考へて贈るべき所は終一巻と
左の如し

寛永六年己巳の秋出陣の上(後水尾天皇)
御所の内勅あり徳川前御中(隠居大御
所秀忠)の外好興子内親王(母、車福の
院の三七才)に徳を以て江戸より大御所上様
(三代家光)の内意を承け書中、中膳
方殿氏(喜右)を考へる、公武の御水と謀
るべき事(九月初旬)又十月初旬(寺
社等の各地院宗徳同行し潤子酒井権
樂領土井大炊師七上洛する)と云ふ大御所
文中のあぢや(一住向うや(未詳)一住向

東林堂製

○
えんし九月
もろし
もろし

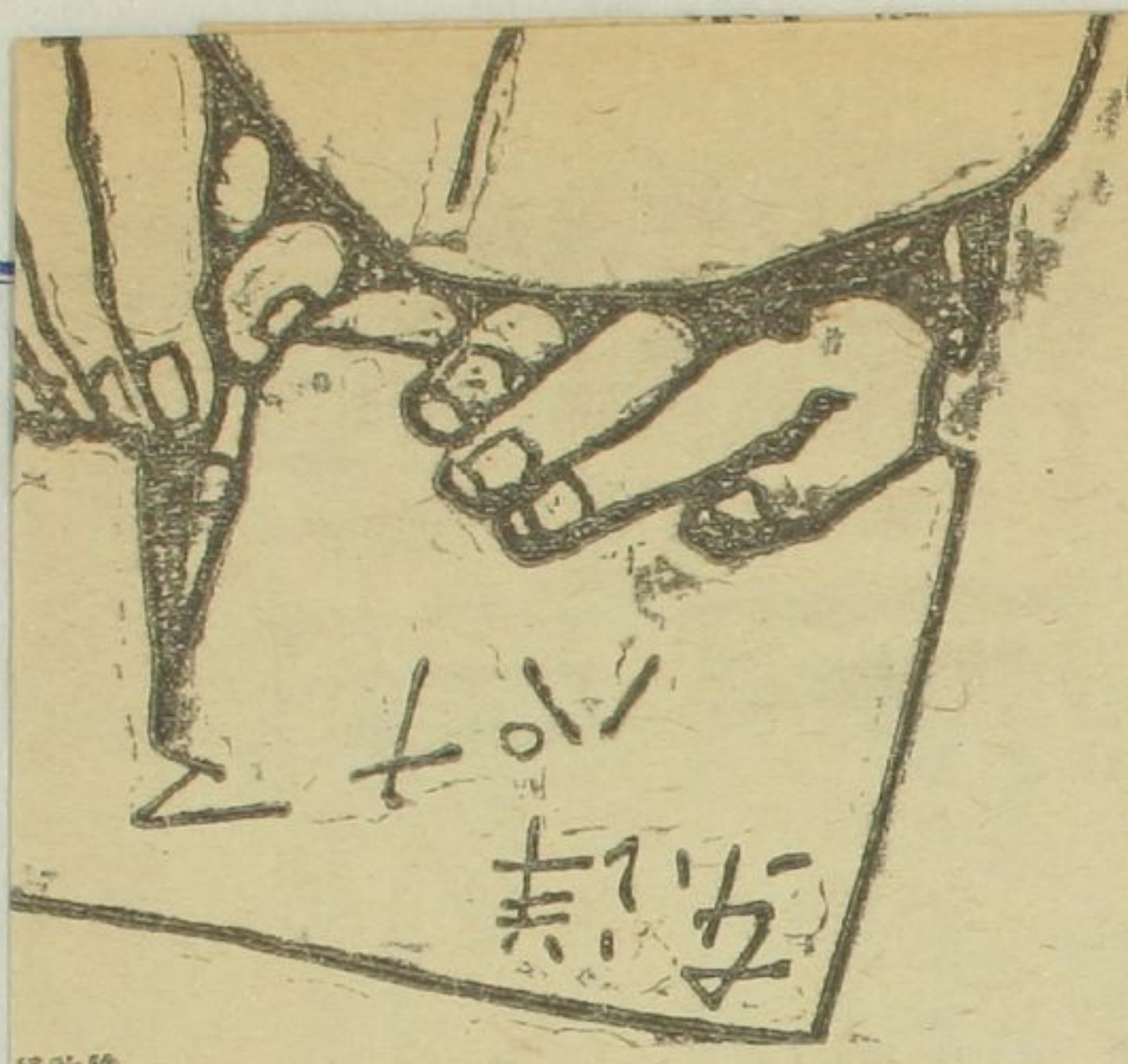
い原の喜、車福の院の在母(敏中氏)喜右
と云ふ江戸大奥の元祖也 喜右と云ふ公家
主任此、喜右と云ふ文中の傳長と云
出陣御所の方子と云ふ喜右の的の尼と
同名を入るや(唯信)も喜右と云ふ
の口名もあつた
文中に七のころつきたる喜右の分と云ふ、
十之(喜右)以下の喜右も甲寅十一月十五日
との八様徳の大典のりえり(しとも思
はる)を喜右の正女帝一より

貴守の史料 一 中欄字の喜右
御免はん家名を塔さす

主の病士も病つゝの如く強んとすきり尚湯息と
 口の得ず得ず津唇の苦を示す古の古く後
 有尾天皇の徳の一面圖と京都と松を控
 ましに中津市 澄野のまありしと
 変車の寺北の多の地況る紅を帝七ス
 子とんを徳を思ふとる、津唐已言江月
 其徳をんてと出のり上山と福をん之
 許す復す津唐の方中上山とあり
 徳のり、竟及する所二三所あり乃ち賤
 論の病命、此しとふと云い
 ○此乃東北二都の念の念とを江乃
 此の事多き、此の事多き、此の事多き

東洋製

大正四年五月廿九日 鐵道院



製造元 日本夏製株式会社

女の病を治すに

頭痛、頭痛、頭中腫脹、耳鳴、難聴、眩暈、視力減退、眼精疲労、喉頭腫痛、聲音嘶啞、心悸亢進、心窩苦悶、深醉、寒熱、情疑、意志薄弱、讀書不能、計算不能、思考力減退、判斷力減退、記憶力減退、不眠、睡眠不要、嗜眠、口渴、嘔吐、惡心、嘔吐、食慾減退、胃部膨重、胃部膨脹、腹脹、便通不整、皮膚冷感、皮膚灼熱、脊髄過敏、手足厥冷、身體震顫、卒倒、色慾異常、生殖感覺異常、遺精、陰痿

一、ヒステリー (症候)

頭痛、耳鳴、難聴、視力減退、言語困難、呼吸困難、心悸亢進、精神興奮、意思異常、情調異常、嘔氣、吃逆、胃痛、腹脹、腸痛、皮膚蒼白、皮膚知覺異常、浮腫、筋肉痲痺、筋肉痙攣、筋肉短縮、神經痛、脊髄過敏、卵巣痛

一、ヒポコンデリー (症候)

意志薄弱、疑懼不安、疾病重視、消化不良、頭痛、耳鳴、難聴、眩暈、眼火閃爍、顔面蒼白、心悸亢進、心窩苦悶、失神、思考力減退、不眠、譫語、惡心、嘔吐、皮膚知覺異常、筋肉痙攣、卒倒

一、腦充血 (症候)

頭痛、耳鳴、難聴、眩暈、眼火閃爍、顔面蒼白、心悸亢進、心窩苦悶、失神、思考力減退、不眠、譫語、惡心、嘔吐、皮膚知覺異常、筋肉痙攣、卒倒

一、腎臟炎 (症候)
 尿濁、濁尿、尿量異常、自尿、血尿、尿量異常、排尿頻、利尿困難、浮腫、皮膚蒼白、皮膚瘙癢、頭痛、視力減退、鼻出血、嘔吐、心悸亢進、睡眠、口渴、口腔乾燥、舌粘稠、食慾減退、便通不整、痛、關節痛

一、貧血
 頭痛、耳鳴、心悸亢進、食慾減退、胃部膨重、胃、若白、浮腫、月經不順、質脆弱

一、老衰
 動脈硬化、皮膚弾力缺乏

此の頃、新潟縣會初期議員の撮影にして今日に於ては容易に之を獲可らず。鈴木昌司山口權三郎
其他の諸氏當年縣下政界の偉材殆ど悉く此寫真中に在り

是れ我新潟縣會初期議員の撮影にして今日に於ては容易に之を獲可らず。鈴木昌司山口權三郎
其他の諸氏當年縣下政界の偉材殆ど悉く此寫真中に在り

其後青泡白頭江口文四郎、願祝如怒中、
澤久四郎、厚重如不可動川上喜右衛門、
着洋服場々如武夫山田權左衛門、其
右形然昂然如佩々之議捐々之姿慨世愛
國者四人、曰高嶋良宣、大橋一、
小柳卯三郎、相馬一、其短少精悍後
藤五郎次、烟如怒々書記富樫苗明也、
爲之第三行
其後則立袖手巨胆遠如望天兒玉茂右
衛門、髯髯々如欲言野村喜右衛門、
意如在局外者二人曰尾崎行雄、曰
齋藤檢藏共書記也、肩臂獨て曾我順次、
風眼隆準如僕天之子後野左門、衣
白衫斜視諸淺淺三郎、短髮而使々如木
間於菟彦、襖衣白而牧野之氣陰顔原
平藏、與秋野會我之際、電、虎勢磯谷
健治、介從原本間之間者即記者也、爲
之第四行、行外立意給伴某々也
此外議員猶十餘人、或遠遊而不曾誠爲
可憐焉、且本年既爲半數交換之期、明
年復與此人得相見否安可期、嗚呼果
敢離閣得復當記之以徵他日云明治十
三年七月一日笠原重信記

福井行(二)

風間 洞門
二十一日は午前十一時會議終了、これ
より先き、廣江廣吉君より招待を受く
、蓋し藤田君を主賓とし、關、館の兩
君を陪賓せるもの、而して手は其又
陪賓として席末を汚すの光榮を有せる
を欣ぶ、廣江君は新編を以て發祥の地
と爲すの人、今福井市會議長たり、予
等乃ち少閑を偷みて、君の好意に副ふ
べく五嶽樓に赴く、樓は羽山腹に置
き、四方開豁、福井市街を一時の中
に收め、風光絶佳也、歌妓中一人あ
り、志乃婦さんと呼び侍る、二夜連續
の宴會に侍れるものに此すれば、正
にこれ群衆の一鶴と祝ひぬ、舉止閑都
、品格貴嬌、芙蓉の水を出づるに似
たり、切めては寫真を請ひ受けて、面
影を憶ふ、此寫真は、や、意の在る
處を打明かしたれども、生憎様と斷ら
れて皆さん先訓御存知の男振を、愛許
又一段と下けたるに、而はゆき、但物
産館經營の砌、美人繪葉書中に、此
妓の陳列あるを目にしたれど、一枚
一錢五厘と値札に呆れて、遂に忍び
て買はで歸れり、新編に於ける新編の
繪葉書は最低一枚十八錢と聞きて、こ
その繪葉書を想望せしむるに、福
井妓の魁楚と語はる時、時時咬齒が、
斯かる安値を附せられて、恰も繪葉の
眞體なる侮蔑をも忍び居るは、何事ぞ
、志乃婦君、此情券が下かりはせず
や、飛んだ處に頭痛に病むも筋氣立
、すれば一たびは袖を惜り合ふた多か

寫真題文

題新潟縣會議員
寫真圖
此圖也新潟縣會三十七人及書記其他八
人寫影也、當正位者洋服者二人、禿頭
而寬弘如能容者、長松村文次郎也、



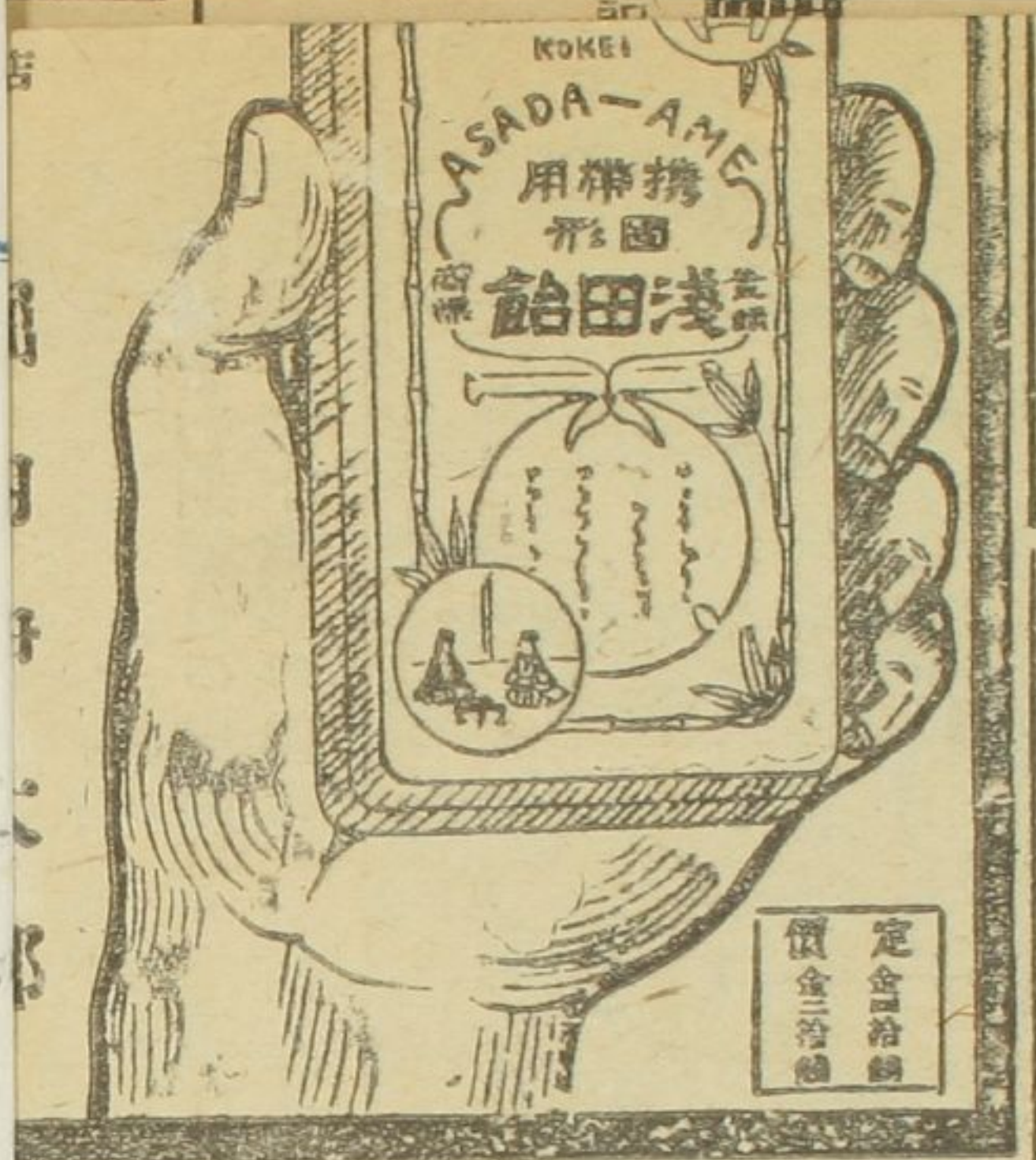
最後々の本紙ニノ一に當世果會に書記たりし今、司法大臣尾崎行雄氏にして本紙主筆として來
縣中にかゝる、寫真説明の詳細は之に題せる別掲の漢文に譲るべし、寫真は當市横山治平氏の
所藏也

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 20 30 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 20 30 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 20 30 40

主の徳士も功の如く強んとすきりあはれ



號九二八一二第



定金拾圓
價金三拾圓

頭痛、頭重、頭内騒動、顔面潮紅、心悸、耳鳴、嘔吐、眩暈、火因、顔面潮紅、心悸、元進、心高苦悶、失神、精神動作不能、不眠、諸語、皮膚知覺異常、筋肉痙攣、卒倒、

一、營養不付
皮膚蒼白、筋骨薄弱、身體
一、精力減退
精神困憊、筋骨疲勞、

如斯人はミツワ人參錠を服用すべし

- 一、頭痛や耳鳴に悩む人、頭痛持ちの人
- 一、頭が重くなり頭内が騒動となる人
- 一、目が疲れ長く見物して居られる人
- 一、逆上して平なり又眩暈して倒れる人
- 一、眠らうとしても寝て居られない人
- 一、仕事をしても眠くてたまらない人
- 一、驚かされて夢をたたりする人
- 一、神経が過敏となり些細の事で気がかかる人、何事にも怒り易い人
- 一、悲しき事もないのに泣きたい人
- 一、悲観、厭世的に、精神鬱々とする人
- 一、記憶の不良、人、時々氣を失う人
- 一、離念續りに起つて樂注の出来ない人
- 一、思考力や判断力の衰弱して居る人
- 一、悪心、嘔吐、食慾減退、消化不良
- 一、びびり、膨満に苦む人
- 一、呼吸切れ、怪汗、元不及び痙攣に陰鬱で悲観する人、遺精で困る人

本舗
御園化粧品
ミツワ石鹼
ミツワ家庭薬
ミツワ椿油
肝油ドロップス
發賣元

はあな功の如く強んとすきりあはれ
 泉重信の解説を記し足んばあめお城の
 既、強くする人物の如く強くとすきりあはれ
 轉に之等の如く強くとすきりあはれ
 乃ちこ
 大正四年六月三日
 〇二月二日の三紙を附載し、概し足元珠二万圓
 紀念遺名を厚くし、出立金給ふこと
 由無んとして、之等の大減價とし、華族中家
 不存の如く、皆を誅せられたる如く、徳義
 せんたることなき、故に、方格も亦その如く、徳
 ありしとき、あはれ見、お城の如く、徳義

九子元の成列ありしと元迄美術を授けたる
：於て印板の得ずしありしと云々元迄
く冬平の揃ふことありし必竟朝吹吳二
の肝煎の結果と見る也の外ありし
の故へしし且つ海傍と云ふ故の口和
りしを充分玩味しと云々故と云々
りししと云々五六場の小巻ありしと云々
しえと云々ありし流石に其手腕の非凡
超域・歎するも、物あり一言に光琳の筆
研と揃りしと云々と云々増と改げし
と焚き花を就しあり一解しと云々
高田ゆに江戸純味屋の店と云々

東
十
本
堂

江戸代の名匠と云々
の乾出陣（？）
そつと云々

○昔の事跡の底に於ては、
んる銭形・小判形の板と云々
人をあつたがまし、
味の名流と云々
見と云々
の板と云々
更の刻ありしと云々
あるも時代ありしと云々
よの此程のものとしと云々

しを伝承するものとする。表紙七〇也

○清即位の大典禮は、いふに、つゞき、打く大典の
ありきと任する事、自今と有職を言
ふ心のそのいふ事、六一日、且、欽命を
んが皇極令を先や、角評する、と、古の
人多き事、いふ事、即位の大禮は、
り、後、前、の、形、と、傳、し、元、檢、の、事、
と、得、る、事、も、思、い、う、皇、と、典、範、の、欽、命、
其、り、な、る、伊、勢、後、裔、と、い、う、即、位、大、典、の、歴、
史、を、の、り、し、く、元、神、々、國、運、の、事、の、が、念、を、
と、務、意、し、し、る、ん、と、い、う、の、り、し、る、事、
元、檢、を、し、し、る、ん、と、い、う、事、思、い、し、る、節

東
林
堂

か、い、う、が、一、の、位、大、典、と、い、う、事、
この世界的日本、一、日、一、等、の、理、の、
日本、に、於、て、い、う、事、も、い、う、事、も、
い、う、事、も、い、う、事、も、い、う、事、も、
勿、論、帝、室、に、歴、史、的、関、係、の、深、き、京、都、を、
い、う、事、も、い、う、事、も、い、う、事、も、
位、の、式、を、京、都、に、於、て、行、い、大、等、令、を、之、れ、
と、い、う、事、も、行、い、し、る、事、も、
思、い、し、る、事、も、便、利、な、事、も、
と、い、う、事、も、京、都、の、縁、が、
本、に、一、等、の、理、の、便、り、
時、勢、が、い、う、事、も、い、う、事、も、

即位の式を考へ、亦たその儀風
の成化に於て出来ざるもの時勢の差を
考へ、その時勢の差を以て之を其の
行ハ何心するかと云ふ所のしく正直に
せしや、亦た柔順に洋式服装の人を交へ
る例に照し、その式許の元禄を以て
考へ、その元禄の時勢に於ては、
考へ、その元禄の時勢に於ては、
考へ、その元禄の時勢に於ては、
考へ、その元禄の時勢に於ては、
考へ、その元禄の時勢に於ては、
考へ、その元禄の時勢に於ては、
考へ、その元禄の時勢に於ては、
考へ、その元禄の時勢に於ては、
考へ、その元禄の時勢に於ては、

東
本
書

外子の使位を以て即位の式に列すること
あることと云ふ元禄の事、
り、
考へ、その元禄の時勢に於ては、
考へ、その元禄の時勢に於ては、
考へ、その元禄の時勢に於ては、
考へ、その元禄の時勢に於ては、
考へ、その元禄の時勢に於ては、
考へ、その元禄の時勢に於ては、
考へ、その元禄の時勢に於ては、
考へ、その元禄の時勢に於ては、
考へ、その元禄の時勢に於ては、

大正四年六月二日

これより九州の信使本月下旬に参りて
一日大隈伯の叢北の令衆と御座りて

一 麥一箱、いゝのいも一籠、瓜一籠等、旁の物、六月三日に給候ひしを
今まで御返事申し候はざりし事、恐入て候、此身延の澤と申す處
は甲斐國飯井野御牧、波木井三箇郷の内、波木井の郷の戌亥の隅
にあたりて候。北には身延嶽、天をいたゞき、南には鷹取が嶽、雲に
つゞき、東には天子の嶽、日とたけ同じ、西には又峨々として大山
つゞきて白根の嶽にわたれり。猿のなく、聲天に響き、蟬のさへ
づり地にみたり。天竺の靈山、此處に來れり、唐土の天台、山親り
こゝに見る。我が身は釋迦佛にあらず、天台大師にてはなけれ
ども、曲る々々晝夜に法華經をよみ、朝暮に摩訶止觀を談ずれば、
靈山淨土にも相似たり、天台山にも異ならず。但し有待の依身
なれば、著されば風身にしみ、食はざれば命持ちがたし。燈に油
をつがず、火に薪を加へざるが如し、命いかでかつぐべきやらん。

東山堂

命つぎがたく力絶えては、或は一日乃至五日、既に法華經讀誦の
音も絶えぬべし、止觀の窓の前には草しげりなん。かくの如く
候に、いかにして思寄せ給ひぬらん。兔は經行の者を供養せし
かば、天帝哀みをなして、月の中におかせ給ひぬ、今天を仰ぎ見る
に、月の中に兔あり。されば女人の御身として、かゝる濁世未代
に法華經を供養しませば、梵王も天眼を以て御覽じ、帝釋は
掌を合せて拜ませ給ひ、地神は御足をいたゞきて喜び、釋迦佛は
靈山より御手をのべて御頂をなでさせ給ふらん。南無妙法蓮
華經、南無妙法蓮華經、恐々謹言。

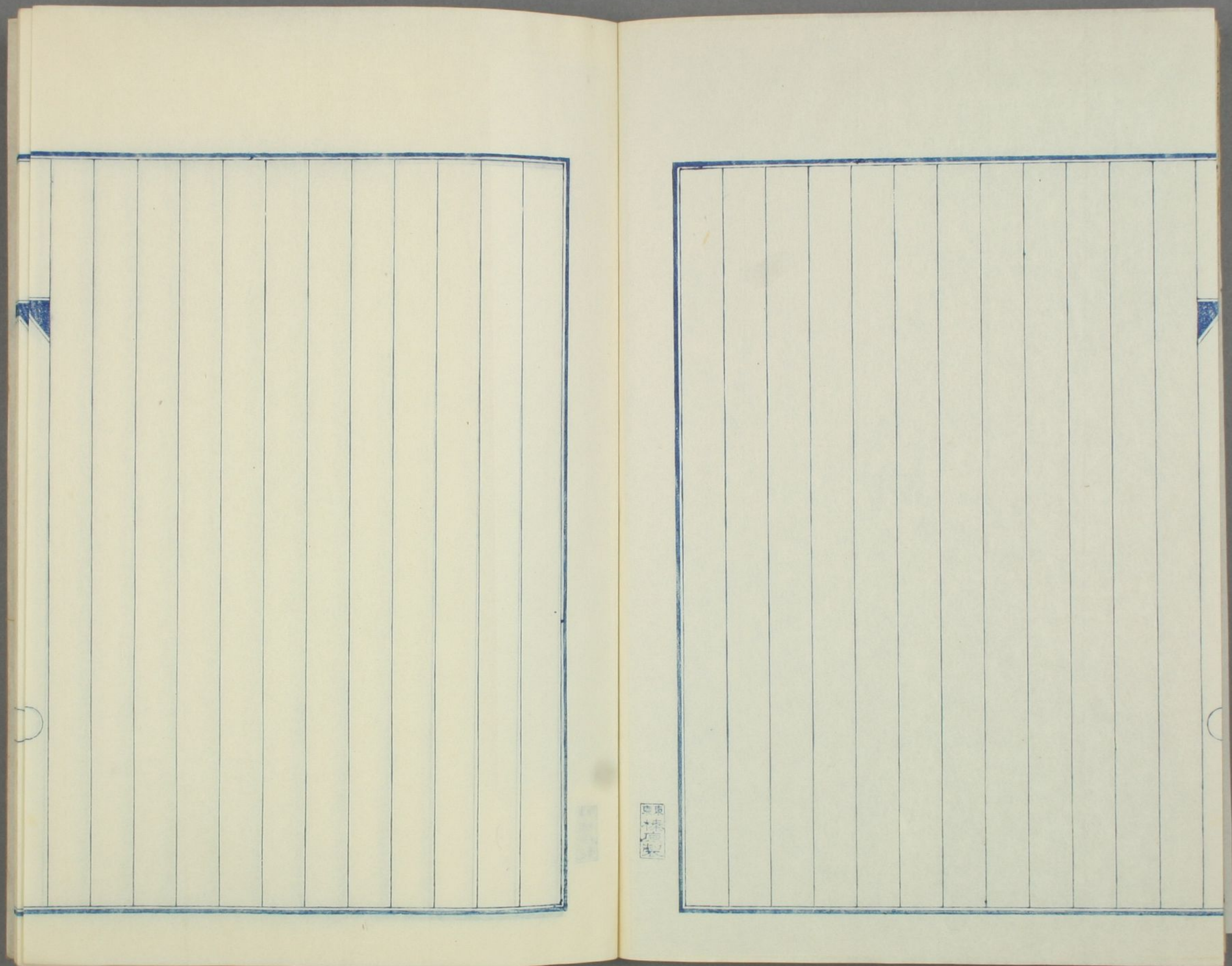
弘安二年乙卯六月二十日
松野殿女房御返事

快流を尊の、其秋也、刑の法等一部を寄
りて、其の日の蓮の姿又あり、湖に乘らん

漢の一番文章の如きを感ずることありてこ
いぬめし聊の所感と感ふと云ふ
日蓮の文の簡勁なる所と其特色あり之れ
を親香の文に比するは後あると問ふと云ふ
とも勁と無し前あると問ふと云ふと云ふ
と女性向なる前あるの文を誇るを本意也
一免後あると云ふを沈痛揚々然として
いあるの人格と境也と宗義の異るを
のふら然と云ふを得たる事
此文大體二段に別す才一段先づ惠賜を謝す
才二段は此の居所の風物を叙し時々天台の
天台山居士の天台山に比する形容にサブリ

東山

テ一あり此筆に無けんは天台山天台山に比する
然らず而して此の叙思ふに到頭才三段を
起すの伏線也才三を為すもの才三段
ハ時々自家を稱する天台大師に擬する染
んの豪放の氣宇掩はんとして掩ふの
才才四段に至る筆路一轉生あるに
才五段油未無くして多む持續し得ん
と人間の本身を吐き終りに此れ無くは法華
経摩訶止觀誦漢の聲も絶たんと
にんかき供給を欲するを云ふを不
のめり才五段意外の同語を得たり
と云ふこいと持ふの地を為す才六段



以下全て

白紙

